

## 『女性文化研究所紀要』50号刊行にあたって

武川 恵子（女性文化研究所所長）

紀要50号を刊行するにあたって、諸先輩から有難いコメントをお寄せいただきました。誠に有難うございます。本研究所の歴史には、本研究所を大切に守り育て、研究者としての精進の場として活動して来られた先生方の、ある意味「青春」「人生」が詰まっていることを感慨深く思うとともに、バトンを受け継いだ責任も感じます。私自身は行政分野で定年退職した後、昭和女子大学へ奉職させていただいておりますが、今回お寄せいただいたコメントにもありますように、本研究所のお陰で、文学や歴史、宗教の中でのジェンダーを研究することの重要性や面白さを感じています。紀要50号刊行にあたって開催されたシンポジウムでいただいた「時代のニーズに応じた研究活動の重要性」についてのご意見とともに、今後の研究所の活動の糧としてまいります。

.....

小原奈津子（昭和女子大学学長）

本学には7つの研究所があり、それぞれの研究所の目的に応じて所属の教員や研究員が活動しています。女性文化研究所は1986年に開設され、本学の女性文化研究を促進し、あわせて内外に女性文化の創造と発展に寄与することを目的としています。目的はいささか抽象的ですが、現代社会のニーズに合ったテーマをその時々によってプロジェクトとして調査研究を進め、その成果を着々と発信しています。また、開設当初より女性文化研究叢書、女性文化研究所紀要を発行し、年に数回公開講座やシンポジウムを開催し、さらに毎年坂東眞理子基金を資金として、女性学周辺分野の優れた書籍に「昭和女子大学女性文化研究賞」、若手研究者に「同研究奨励賞」を授与するなど、その活発な活動は内外の女性学研究の促進に貢献しています。

紀要50号を記念して開かれたシンポジウムでは、これからの女子大学の方向性、女性・ジェンダー研究の動向、本学研究所の計画などが語られた後、大学院生や修了生からのコメントもあり、盛沢山の内容でしたが、どれもそれぞれの立場から率直で熱のこもった発表でした。登壇者の皆さんの発言には女子教育に携わるものとして大いに元気づけられました。他の多くの視聴者も同様にエンカレッジされたと思います。このシンポジウムの発言者ならびに関係者のみなさんに感謝申し上げるとともに、当研究所のさらなる研究の発展と社会に広く発信されることを期待しております。

.....

天野 寛子 (昭和女子大学名誉教授・女性文化研究所元所員)

——人生100年時代の社会の展望を——

女性文化研究所紀要が50号になるとのことおめでとうございます。

7月末の、紀要50号を記念して開かれたシンポジウムを拝聴しました。発言の中に「女性文化研究所の名称変更」への言及があり、それに対して「女性文化」は昭和女子大学創立者人見東明先生の詩にあるように大学の原点であること、時代は変わっても女性にとって生きやすい社会的・文化的な状況にはなっていないこと、研究内容も現代だけではなく、歴史を遡る研究も包含できるような研究所であることを考えると、軽々に名称変更は考えるべきではないと応えられたのを拝聴し、同感でした。これから先、アジア圏の国々の女性研究交流も進むと思います。その場合、女性文化的視点を欠落させてはならないと思います。

女性文化研究所の研究として、人生100年時代の、特に75歳以後の女性の社会的・文化的な生活の研究に基づく展望を示して欲しいと思います。

「人生100年時代」と言われつつ、65歳以上は「老後」(前期高齢者、後期高齢者)と一括りにされ、特に後期高齢者と言われる時期について、生活主体の側からの生活が十分に研究課題にされて来なかったと感じています。介護目線(介護支援も含む)、医学目線、経済目線、観光・終活等々に関わり研究や話題は進んでいますが、「人生100年時代の生活主体目線」の研究成果が少ないと感じます。現在、70～80歳代を生活している女性たちは自身で果敢に試行錯誤をして、新しい境地を開きつつあると思います。その人たちの試行錯誤を研究次元で把握し、人生100年時代の社会はどのようなものかを展望していただきたいと思います。

.....

太田 鈴子 (全学共通教育センター非常勤特任教授・女性文化研究所研究員)

『昭和女子大学女性文化研究所紀要』が50号刊行を迎えることは本当に喜ばしいことと思います。女性文化研究所が開所した時、昭和女子大学の校歌の一節「女性文化の帆をあげて海路はるけく漕ぎ出たり」を思いました。いよいよ昭和女子大学も女性が自力で船出をする日が来たのだと思いました。そして『女性文化研究所紀要』が刊行され本格的な研究が始まりました。このことは学内に相談室が開室され、ハラスメントに関心が向けられるようになったことと無関係ではないでしょう。わたしは中でも伊藤セツ先生から大きな示唆と気づきをいただいたと思っています。伊藤先生が夜遅くまで院生の論文指導をされ、卒業後の進路を考えられ実際に活躍する人を世に送り出されている姿を拝見していて、可能な限り教え導くことが女性の自立と活躍につながることを実感しました。女性は学ばなければ、その声を多くの人に理解してもらうことはできないと気づきました。伊藤先生的情熱が『女性文化研究所紀要』のあちこちに見えます。また『女性文化研究所紀要』には、研究所が主催した「公開講座」「パネルディスカッション」も掲載されています。これは現

状を明らかにしながら将来の展望を見通す充実した内容で、後々の研究資料として意義あるものだと思います。『女性文化研究所紀要』を、繰り返し読み返してご教示をいただき、育て育てられるまたない研鑽の場として大切にしたいと思います。これまでご執筆なされた方々に心より感謝申し上げます。

.....

小川 浩（昭和女子大学元教授・女性文化研究所元所員）

紀要50号記念号の発刊おめでとうございます。研究所と紀要の長い歴史に思いを馳せるとともに、その礎を築き、これまでそれを支えてこられた方々のご尽力に改めて敬意を表します。私が所員だったのは、一昔前、瀧澤正彦先生ご退任のあと、2010年前後の短い期間で、その上われながら不活発な所員で、もっぱら皆さんの会議での発言や研究発表を拝聴・拝読し、学ぶことに終始するような状態でした。しかし私自身にとってはそれが貴重な体験でした。とりわけ英文学分野で、ミルトン描くところのイヴについての研究例会でのご発表（「悪女でもなく、善女でもなく」というタイトルだったと思いますが、記憶違いがあるかも知れません）、そして紀要に寄稿された、中世期の一連の宗教散文作品に投影された女性像をめぐってのご論考数篇などが、いまでも強く印象に残っています。文学作品のもつそのような一面に目を開かれる思いがし、そのようなご研究が「女性文化研究」の一翼を担っていることに大いに意を強くしたのです。近年は、研究所と海外の大学などとの交流も進められていると聞いています。研究所の（そして紀要の）今後の一層のご発展をお祈りします。そしてその中で、文学研究が今後も「女性文化研究」の一環として受け継がれていくことを念じて止みません。私もこれからも、「女性文化研究」の意味を考え、学び続けたいと思います。

.....

掛川 典子（昭和女子大学名誉教授・女性文化研究所元副所長）

——紀要50号を祝して——

『女性文化研究所紀要』50号おめでとうございます。昭和61年（1986）創設の研究所は36周年ですから、不思議に思われる方がいらっしゃるかも知れません。紀要を年2回発行していた時期があるのです。

創設時は人見楠郎学長・理事長が研究所所長、白石浩一一般教育部長が副所長に就任され、大学1号館6階南側の明るく広い空間に、5部門と資料部からなる、女性文化に関する学際的研究機関として発足しました。新たに収集する文献は、女性学・男性学・男性史などを新分類として加え「女性文庫」に収録することを決め、研究会を開催し、紀要を発行しました。折々の人見所長とのやりとりを懐かしく思い出します。

平成元年（1989）に大学院博士課程生活機構研究科が設置され、研究所は生活機構研究科の附属研究機関になりました。所長は生活機構研究科教授の福場博保、岩脇三良、後藤

淑、伊藤セツ先生が歴任なさいました。この時期、運営の実質を担われた伊藤セツ先生を中心に、ジェンダー視点を持つ若手研究者を育てるため尽力しました。「ゲリッツェン女性史コレクション」を購入し、女性学公開講座を連続開催、研究会を重ね、読書会も開催し、紀要は恒常的に年2回発行にし、ニューズレターやワーキングペーパーも発行、さらに研究所研究叢書を軌道に乗せました。嬉しいことに、博士号を取得なさった方々は、本学のみならずお茶の水女子大学、東京学芸大学、横浜国立大学、神奈川大学、日本大学等々で活躍なさっております。

新しい展開は、内閣府男女共同参画局初代局長を務められた坂東眞理子先生を所長にお迎えしてからです。社会における男女共同参画の実現、特に企業内での女性の地位向上に果たす女子教育の役割等に、より自覚的な企画がなされる時期に入りました。平成20年(2008)には坂東眞理子基金による「昭和女子大学女性文化研究賞」・「女性文化研究奨励賞」を創設し、現在に至っております。

設立当初から研究所の仕事を担当した者として、紀要50号の刊行は感慨無量です。研究所のますますのご発展を祈っております。

.....

**木間 英子** (昭和女子大学名誉教授・女性文化研究所元所員)

『女性文化研究所紀要 第50号』刊行おめでとうございます。私も共著の形で拙稿を何度か掲載していただきました。テーマは一貫して本学の社会人メンター制度の検証です。2011年キャリア支援体制の一つとして社会人メンター制度が導入されたのですが、私はキャリア支援部の一員として、その立ち上げと揺籃期社会人メンター制度の運営に関わってきました。本学の社会人メンター制度は、豊富なキャリアをもつ社会人女性約300人(現在は約370名だそうです)が登録されていて、学生が話を聞きたいメンターを選ぶという画期的なものでした。公募によって登録された社会人メンターは、学生たちのために自らのキャリア形成の経験知を様々な方法で伝え、学生たちは自らを振り返り、学生時代にやるべきことを考え、ライフコース選択のヒントを得ます。このようなメンター制度が果たして学生たちにどのような影響を与えているのか、また、社会人メンターはメンタリングを通して何を得ているのか、その検証をするというのが具体的な研究内容でした。ただ、この検証は、もともと文系の私には手に余るもので、統計学の知見を持つ所員、現グローバルビジネス学部小森亜紀子准教授との協同なくしてはなしえないことでした。分析作業はKJ法に則り、メンタリング終了後に書かれた学生の膨大な感想文を読み込んで、重要と思われる語句を小さな切片に書き込むことから始まりました。時にはしゃいで勢いを付けながらいつ終わるとも知れない作業を続けた夏の日を今でも思い出します。「もうやめよう」とどちらかが弱音を吐くまで続けられました。

紀要に発表する機会を得たことで、学生支援のために立ち上げた制度を客観的な眼でとらえ直し、問題点や課題を見つけだすことができました。実証的な研究を通してその成果

を明らかにすることで、このような制度は初めて成熟していくのだと思います。女性文化研究所がこれからも地道な研究を支えていって下さることを願っております。

.....

**島田 淳子**（昭和女子大学名誉教授・女性文化研究所元所員）

女性文化研究所紀要50号記念シンポジウムの開催および記念号刊行おめでとうございます。多様な視点から女性文化の研究を推進して来られた本研究所のためまぬ活動の歴史に心からの敬意を表します。

私は、2000年11月に、公開講座「講演とシンポジウム 女性研究者の成長—活躍する若手研究者」で、講演をさせていただきました。ご依頼をいただいた時、実は困りました。私の専門は調理科学で、社会科学的な知識や経験はお粗末だったからです。しかし常々「大変な仕事に来たらチャンス。つかめ!」と、皆を励まし続けてきた私です。逃げるワケには行きません。そこで、「体験を踏まえて」と副題を付けて、下記の話をさせていただきました。

\* 自信がなくて折れそうだった若き日を思い出して～。

好きなものを専門として選ぼう。好きなら大変でも続けられる。

他人と比較しない。昨日の自分と比較する。一步前進で、よしとしよう。

\* 日本学術会議会員として、また女性科学研究者の環境改善に関する懇談会（JAICOWS）の会員として、必死に活動した経験から～。

学問の潮流は変わる。これを信じて、新しい視野から自分の専門を貫こう。

日本の男女共同参画は遅れている。実態を見据えて、主張したり協調したりが大切。

チャンスは掴もう。次は、後に続く女性にチャンスを与えよう。

本学に在職中、多くの教職員の皆様と共に夢中で頑張りました。本学での思い出は私の宝物です。皆様に心からの感謝を送ると共に本研究所および本学の一層のご発展を期待いたします。

.....

**土舘 優子**（近代文化研究所課長・女性文化研究所元主任）

——祝「女性文化研究所紀要」50号刊行——

記念すべき50号のご刊行をお慶び申し上げます。図書館・近代文庫からの異動により、第30号（2004）から35号（2008）の編集事務を担当させていただき、大変お世話になりました。伊藤セツ先生から坂東眞理子先生へバトンが渡される節目で、女性学公開講座が第13～18回と充実する中、「読売・昭女大女性アカデミア21」が3年連続で開催された頃にあたります。創設20周年（2006）には、初代副所長白石浩一先生（初代所長人見楠郎先生 故人）、2代所長福場博保先生、3代所長岩脇三良先生、4代所長後藤淑先生、5代所長

伊藤セツ先生、6代所長坂東真理子先生と、後の副所長掛川典子先生ほか沢山のお弟子さんや所縁の方々が全揃いの賑やかな祝賀会と特集号が組まれました。『女性文化研究叢書』第4～6集、日本学術会議主催の女性学・ジェンダー研究NT会議(2008)への同行、月例読書会(天野寛子先生主宰)など思い出は尽きません。今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。

.....

**藤崎 春代**(昭和女子大学こども園統括園長・女性文化研究所元所員)

私は、女性文化研究所の所員として、主に叢書の編集にかかわらせていただきました。昭和女子大学には7つの研究所がありますが、紀要のみでなく叢書も刊行していることは、女性文化研究所の特徴だと思います。叢書では、時代の動向を踏まえたテーマが設定され、研究が立ち上がってきました。個別で取り組む研究もあれば、何人かでチームを組む研究もありましたが、所員の専門性を反映して、各研究の目的や方法は多様でした。研究の立ち上げの段階・途中段階での検討会では、活発な意見交換が行われ、私自身も多くのことを学ばせていただきました。

ところで、私は2021年度から附属の認定こども園にかかわらせていただいておりますが、その中で、入園先を検討している保護者が、お子さんの20年先を見据えて(20年後に活きる保育、というのがこども園のモットーです)園選びをしておられる、ということに気が付きました。特に、女兒の保護者は大学の特徴までも視野に入れて園選びをしておられ、大学の掲げる女性像(人間像)に関心をもっておられるようです。

様々な方々が様々な視点から大学に関心を持っておられる中、今後も、女性文化研究所を中心に昭和女子大学の特徴や方向性を指し示す多様かつ学際的な研究が活発に行われることを期待いたします。そして、教育と研究が両輪となって、昭和女子大学らしさが広く社会に発信されることを楽しみにしております。

.....

**森 ます美**(昭和女子大学名誉教授・女性文化研究所元所員)

『昭和女子大学女性文化研究所紀要50号』の刊行、おめでとうございます！

『紀要』編集委員を務めた日々―いつも授業や公務の合間を縫って女文研に走っていた―が思い出され、いずれの号も執筆者のみならず、編集委員や編集事務担当者の尽力の賜物であることを改めて思い、この積み重ねに深い感慨と感謝を覚えます。

私は、『紀要』は研究所の「顔」と思ってきました。研究所所員として「顔」に恥じない貢献を意識してきましたが、今となっては自信がありません。振り返ると『紀要』への私の最初の投稿は1990年の第5号(「戦後女子労働市場分析の視点と方法」)、最終投稿は退職年度の2020年の第47号(「USW Local 1998の職務評価制度と賃金—オンタリオ州ペイ・エクイティの実践—」)です。前者は、私の専門領域「労働とジェンダー」研究の理論

的基礎となる論文であり、後者は、私ならではの研究課題、同一価値労働同一賃金研究の一環をなす研究成果です。この2論文の間に、私の長い研究生生活が詰まっているといっても過言ではありません。これ以外では、『紀要』に5回に亘って掲載した「女子学生のための優良企業ランキング」の調査・研究活動も懐かしい思い出です。

世はデジタル化時代、『紀要』もオンライン公開へと進化しています。でも、『紀要』が女性文化研究所の「顔」であることに変わりはありません。50号刊行をステップに、100号に向けた更なる積み重ねと女性文化研究所の発展を期待しています。がんばって下さい！